

R. Browning の宗教詩：*A Death in the Desert* に於ける信仰と懐疑

野口忠男

- I はじめに
- II 作品の背景
- III ヨハネの魂観
- IV ヨハネの宗教経験の経緯
- V ヨハネの信仰と懐疑
- VI おわりに

I はじめに

W.C. DeVane は *A Death in the Desert* 「荒野の死」について、これは“his most closely reasoned *apologia* for Christianity”⁽¹⁾ 「彼の最も綿密に説かれたキリスト教の弁明の書」であると述べ、Browning の顕著な宗教思想の核心を見事に捕らえている。David Shaw は、使徒ヨハネを“a rationalist, who tries to establish the transcendent logic of a ‘love’ behind ‘the will and might’”⁽²⁾ 「意志や力の背後にある愛について超越的な論理を組み立てようとする合理主義者」であると考えている。確かに詩中に於けるヨハネは、生来の巧みな言葉使いと調和の取れた論理をもって、キリストの福音の本質を説き明かしていく。一方 E. LeRoy Lawson は、この合理主義的な解釈に反対し、“His final arbiter is not reason but personal experience”⁽³⁾ 「彼の最終決定者は理性ではなく個人の経験である」と述べ、個人の経験を重視する立場を示し、さらに“His defense is subjective and pragmatic”⁽⁴⁾ 「彼の弁明は主観的で独断的である」と論じている。

個人の経験の重要性に関して、R. Langbaum は *The Poetry of Experience* 『経験の詩』の中で誠に意義深い観点を呈示している。“the doctrine

of experience—the doctrine that the imaginative apprehension gained through immediate experience is primary and certain”⁽⁵⁾「経験主義—直接経験を通して得られる想像的な理解は、最初にして確実なものであるという主義」。さらに彼は“a living reality”「生き生きとした真実」を生む直接経験について詳説する。“the act of knowing spontaneously and completely is an act of imaginative projection into the external object, an act of identification with the object; so that the living consciousness perceived in the object is our own.”⁽⁶⁾「自発的に完全に知る行為とは、外部の対象物へ想像的な投影をはかる行為、対象との同一化をはかる行為である。そこで対象物に認められる生き生きした意識は、私たち自身のものである。」これは対象を分析的に知る行為ではなく、全体的に知る行為であり、対象に生命を吹き込み、自己と対象との同一化を通して自らを発見するロマン主義的な認識方法と理解されるものである。

私達は、語り手ヨハネが過去、現在、未来に於いて認識する宗教経験を重視しながら、論理的で非活動的なヨハネの宗教観ではなく、生命的で活動的な宗教観を考えてみたい。さらにヨハネの宗教経験に基づく霊的な認識を通して、詩人 Browning が語ろうとする人間の尊厳と言える霊性の優位性と至純な行為の真実性を探りたい。

II 作品の背景

A Death in the Desert 制作の正確な日付ははっきりしていない。この詩は1855年の *Men and Women* 『男と女』に収められている *Cleon* や *Karshish* の流れに添う宗教詩であり、1861年6月に Browning 夫人が亡くなる前に一部書かれたものと思われる。Browning が宗教詩を書く背後には、当時の著しい科学の進歩への信奉とキリスト教への懐疑が大きく渦巻いていたのである。Charles Darwin(1809-82)は、“natural selection” 「自然淘汰」による生物の進化の法則 *The Origin of Species* 『種の起源』(1859年)を発表し、科学や宗教界に衝撃を与えたのであった。宗教に於いては、1846年に George Eliot によって英訳された Richard Strauss の *Das Leben Jesus* (1835年) や Renan の *La Vie de Jésus* (1863年) つまり高等批評(Higher Criticism)の影響と国教会の聖職者たちの筆になる

Essays and Reviews 『随筆と評論』（1860年）の宗教教義への攻撃が考えられる。Browning は Renan の *La Vie de Jésus* を読み、それに関して1863年11月19日に Miss Blagden に手紙を書いている。彼は Renan の本には真面目さが欠けると非難し，“if he thinks he can prove what he says, he has fewer doubts on the subjects than I—but mine are none of his”⁽⁷⁾「仮に彼が自分で語っている事が証明出来るとしたら、彼は私よりもこの問題について疑惑が少ないことになります——しかし私の疑惑は彼とは少しも関係ないものです」と言明している。さらにヨハネに言及し，“His admissions and criticisms on St. John are curious.—so much John done”⁽⁸⁾「彼が聖ヨハネを認めたり批評するやり方は、奇妙なものです。——ヨハネはもっとたくさんのことを行ったのです」とヨハネの行為の偉大さを語っている。Renan は、第四福音書の信憑性について次の様な攻撃の言葉を述べている。

I dare not be certain that the fourth gospel was written entirely by the pen of an ex-fisherman of Galilee.A circumstance, moreover, which fully proves that the discourses reported by the fourth gospel are not historic, but compositions intended to cover with the authority of Jesus, certain doctrines dear to the compiler, is their perfect harmony with the intellectual state of Asia Minor, at the time they were written, Asia Minor was then the theatre of a singular movement of syncretic philosophy; all the germs of gnosticism were already in existence.⁽⁹⁾

私としては、この第四福音書がガリラヤの名もない漁夫の筆によって全部書かれたと信じることは出来ない。……さらに第四福音書が伝えている話は、歴史的なものではなく、イエスの権威を被い隠す意図で書かれた作為の文書、つまりこの編者にとって大切なある種の教義であり、これをよく示している証拠と言え、それらが小アジアの知的な風土と完全に調和していたことである。これらが書かれた当時、小アジアは混合主義哲学の並み並みならぬ運動の舞台であり、グノーシス主義のあらゆる萌芽がすでに見られたのであった。

Browning は *A Death in the Desert* に於いて、学問的に Strauss や Renan の主張に回答することは出来なかった、しかし、彼は詩という武器を用いて最愛なる使徒ヨハネと福音書の真実さを弁明するために全力を尽くしたのである。彼は1869年の Mrs Orr への手紙で、人間がキリストを必要としている理由を語っている。“I am none the less convinced that the life and death of Christ, as Christians apprehend them, supply something which their humanity requires, and that it is true for them”⁽¹⁰⁾「私はそれでもなおキリストの生と死は、キリスト教徒達がそれらを理解しようとする時、彼らの人間性が求めているもの、彼らにとって真実なものを何か与えてくれると信じている。」さらに彼は神の愛とキリストの受難について次の様な英知に満ちた言葉を述べている。

The evidence of divine power is everywhere about us; not so the evidence of divine love. That love could only reveal itself to the human heart by some supreme act of *human* tenderness and devotion; the fact, or fancy, of Christ's cross and passion could alone supply such a revelation.⁽¹¹⁾

神の力に関する確証は、いたるところに見られますが、神の愛についてはそうではありません。神の愛は人間の優しさや献身といった何か至高の行為によって、人間の心の中に自然に生まれて来るものです。キリストの十字架と受難の事実、あるいはそれを思い浮かべることによって天啓が与えられるのです。

Browning は、神の愛は自己を捨て他者の人格に深く触れる無償で至高な愛の行為によってはじめて実現されるものであるとしている。さらにキリストの十字架の受難を我ものとして、ありありと思いがく時に、キリストの神聖な愛と力に触れ、天啓が直観されると説いている。これらは *Pippa Passes* に於ける純粹無垢な Pippa の至高なる愛の行為や *The Ring and the Book* の Caponsacchi の真実な無償の行為に明示され、人間の悪や懐疑に打ち勝つ究極の真理となるものである。

私達は最後に聖書的背景を見ておく必要がある。この詩の中心人物は、

ヨハネであり、Browning は彼を『第四福音書』『ヨハネ書簡』『ヨハネ黙示録』の著書であると考えている。ヨハネの父ゼベダイは、ガリラヤ湖畔の漁師であった。彼は舟を持ち雇い人を使用していたことから見て、かなり裕福な生活をしていただようである。母については明らかではないが、イエスの母マリアの姉妹に当るサロメであったと言われている。ヨハネは兄ヤコブと共にガリラヤの漁師であった。二人はガリラヤ湖畔でイエスから召命を受けて弟子となった。ヨハネは十二人の弟子に加えられ、ペテロやヤコブと共にイエスに最も近い三人の弟子として宣教活動に参加した。そのために彼はイエスの言葉や行動に直接触れることが許され、かずつの不思議な奇跡を目にし、イエスを通して神の愛と力を深く体験していたと言える。彼は激しい気性の持主で、イエスから「ボアネルデ」（雷の子）という名を与えられた。彼は最後の晩餐の後、イエスが捕えられた時、他の弟子たちと共に逃げ去った。彼は復活のイエスが、テベリヤ湖畔に現われた時、イエスの姿に出会ったのであった。

イエスの死後、彼はある期間エルサレム教会で指導的な役割を果し、原始教会の重要な人物として活躍していた。しかしながらヨハネの晩年の消息は不明である。⁽¹²⁾Browning は、ゼベダイの息子ヨハネが70年頃にユダヤ人によって殺害され、そのために福音書が書けなくなったと言う説は取らなかった。彼はエペソの僧正ポロクラテスが、196年に述べた話——ヨハネはローマのトラヤヌス帝(90-117)の時代まで長生きし、エペソで死んだ後神のみ胸にいだかれたという説を採ったのである。

Browning は、四人の求道者に見守られて荒野の洞窟に横たわる最期のヨハネを想像し、劇的独白の手法でもって、魂の働き、キリストの生と死、神の實在、懷疑と信仰の意味などを説いていく。死に直面しているヨハネが語る言葉には、観念主義者の悲観ではなく、神の愛の実践に生涯仕えた人間の気高き楽観が終始感じられる。

III ヨハネの魂観

年を重ねたヨハネが荒野の洞窟に横たわっている。四人の付添の求道者たちが、最後の言葉を聞こうとして静かに見守っている。洞窟の外では、無知でみすばらしい姿のバクトリア人が、ヨハネを捜し求める兵士や盗賊に備えて見張っている。彼らはヨハネの口唇を葡萄酒で湿したり、

額に冷水を注いだり、洞窟の中を芳香で満すのであるが、ヨハネはいつでも目を開けようとしぬ。彼はただ首をまげて微笑したのみである。この時少年が、ヨハネ伝の一部“*I am the Resurrection and the Life*”⁽¹²⁾「我は復活なり、生命なり」が刻まれている鉛板をたずさえて来て、彼に示した。彼は指で触れると直ちに目を大きく見開いて起きあがったのである。時は荒野の真昼である。この詩は求道者の一人 Pamphylax が、このヨハネの最期の場面を後日羊皮紙の巻物にギリシア語で書き残した形になっている。

覚醒したヨハネはまず人の魂について自説を披瀝する。魂は三つの構成要素から成り立つと言う三位一体説である。この考えは、*A Death in the Desert* の中心思想を解く重要な鍵と言える。

This is the doctrine he was wont to teach,
 How divers persons witness in each man,
 Three souls which make up one soul: first, to wit,
 A soul of each and all the bobily parts,
 Seated therein, which works, and is what Does,
 And has the use of earth, and ends the man
 Downward: but, tending upward for advice,
 Grows into, and again is grown into
 By the next soul, which, seated in the brain,
 Useth the first with its collected use,
 And feeleth, thinketh, willeth,—is what Knows:
 Which, duly tending upward in its turn,
 Grows into, and again is grown into
 By the last soul, that uses both the first,
 Subsisting whether they assist or no,
 And, constituting man's self, is what Is—
 And leans upon the former, makes it play,
 As that played off the first: and, tending up,
 Holds, is upheld by, God, and ends the man
 Upward in that dread point of intercourse,

Nor needs a place, for it returns to Him.

What Does, what Knows, what Is; three souls, one man.

(II. 82-104)

これは彼が常に説いた教えである、
それぞれ人間の内には異なる人格があり、
三つの魂が和して一つの魂を形成している。
すなわち、第一の魂は肉体の各部にかかわるもの、
その中に宿り、働きをなし、行うものである、
地上の役に立ち、人間をそこで完成させるものである。
しかし助言を求めて上方に向い、
発展し、さらに発展し
第二の魂へと到る、それは頭脳に宿り、
第一の魂を総合的に用いて、
感じ、考え、意志するものである——知るものである。
それは正しく上方をめざして昇り、
発展し、さらに発展し
第三の魂へと到る、それは最初の二つの魂を利用し、
二つの助けがあってもなくても存在するものであり、
人間の自我を形成しているもので、在るところのものである——
第二の魂にたより、それが第一の魂を利用するように、
活用する。上方に向い
神を捕え、神に捕えられ、
あの恐るべき神との交わりの瞬時に、人間を完成させるものである、
宿る場所は必要としない、なぜならそれは神に帰しているからである。
行うもの、知るもの、存在するもの。三つの魂が和して一人の人間
と成る。

第一の魂は、現世の肉体的な働きに関連するもので、肉体に宿る魂である。これは別の表現を用いれば感覚的知覚あるいは経験的認識に関与するものである。Browning はこの感覚的な魂を“*What Does*”「なすところのもの」と名付けている。この魂は助言を求めてさらに発展し、第

二の魂へと到ろうとするものである。彼は第一の魂を肉体の範囲に限定して把えるのではなく、あくまで動的な発展の原理として理解している。第二の魂は、知的で主として頭脳に宿るものである。第一の魂を使用して、感じたり、考えたり、意志したり、欲したりするものである。これは“*What Knows*”「知るところのもの」と言われ、理性的認識を司り、第一の魂と同様に高みを目指して正しく発展していく、やはり動的な原理として把えられている。第三の魂は、人間の精神の中核を形成している魂である。これは神によって支えられ、神を信じ神に結びつき、人間を神の世界へと進ませるものである。これは“*What Is*”「存るところのもの」と言われ、宗教的神秘的認識を成し、経験的認識や理性的認識を超越した直観に係わる領域に存する。Browning の認識の究極に到って見られるもので、キリスト教的靈的直観と言えるものである。以上の三つの魂は、互いに密接につながり、相融合して、一つの魂となり人間の至高な精神と肉体の活動をなす源泉である。これがヨハネの信仰の精髓を形成する靈魂の三位一体と言われるものである。

ところで Browning は魂の三位一体の考えをどこから学んだのであろうか。彼は魂の存在と働きに関して、初期の詩 *Pauline*⁽¹⁴⁾ から連綿と引き続いて歌っている。魂の存在の考えは、旧約聖書や新約聖書に見られ、また詩人が親しんで読んだ Plato の著作中に説かれている。新プラトン派の創始者 Plōtinos(205ころ-269)は、靈の働きについて次のように述べている。

第一は靈に於けるヌース的な部分で、その働きはヌースと同様に知的直観である。第二は靈本来のもの即ち「分別的な靈」で、意志や表象力、記憶、内部感覚、ドクサ、更に思考的分別知、推理等これに属する。第三は靈の肉体へ関係する部分即ち「非ロゴスの靈」で、その働きは特に肉体との共同に依る働きであって、外部感覚や低次の表象力、植物的なものや動物的なもの、更に種子的ロゴス等これに属する。⁽¹⁵⁾

以上の引用から理解されるように、Browning の魂の三位一体説は、Plōtinos の哲学に強く負うていると考えられる。彼の考えによると、存

在の根本をなすものは「一者」であり、一者はヌースとなり、さらに霊となり自然という順序で流出する。流出した霊は、真に純粋な霊となって一者と融合することが力説される。例えば Abt Vogler が巧技入神の境地に達し、神秘的な体験を行う過程には、明らかに Plōtinus の哲学の影響が色濃く認められる。⁽¹⁶⁾

さらに Augustinus (354-430) は『告白』の中で、人間の精神に見られる三位一体について次の言葉を述べている。

私のいう三つのものとは「存在する」、「知る」、「意志する」、これです。すなわち、私は存在し、知り、意志します。私は、知り、知りかつ意志する者として存在し、自分が存在しかつ意志することを知り、また、存在し知ることを意志します。⁽¹⁷⁾

Augustinus は、神の三位一体が被造物である人間の精神の中にも、類似したものとして見出されることを示そうとしているのである。この類似性の探求を通して、私たちは三位一体なる神が、私たちの理解をはるかに超越した実在であることを思い知るに到るのである。それにしても、「存在する」、「知る」、「意志する」精神の有機的な働きには、Browning の魂観に似た考えが紛れもなく流れている。彼の魂観は、Wordsworth の認識の形態を通して、さらに Shelley を経由し、魂の優位性の思想を獲得したものとと言える。W. L. Phelps は、Browning の根本思想を四つ掲げている。

the doctrine of the elective affinities; the doctrine of success through failure; the doctrine that time is measured not by the clock and the calendar, but by the intensity of spiritual experience; the doctrine that life on earth is a trial and a test, the result of which will be seen in the higher and happier development when the soul is freed from the limitations of time and space.⁽¹⁸⁾

親和力と言う教義、失敗の成功と言う教義、時は時計や暦ではなく、霊的体験の強さで計られると言う教義、地上の生活は試練と試して

あり、その結果は魂が時と空間の限界を越えて自由になる時のより高いより幸福な発展に於いて見られると言う教義。

最後の教義には、Browning の魂の考えが如実に表現されている。つまり彼は時空を越えて魂が自由に発展することを堅く信じていたのである。

IV ヨハネの宗教経験の経緯

死に瀕するヨハネは魂を駆り立て、“the Word of Life”「生命の言葉」を知る最後の者として過去の体験を語る。彼はイエスの口から直接教えを聞き、世界をめぐり歩いてそれを人々に伝えることが使命であった。人々は彼の言葉を聞きそれを信じてくれた。かれは後にパトモス島で黙示に接し、それを語られた通りに書くことを命じられた。初期にヨハネが体験したイエスとの交わりは、感覚的知覚つまり第一の魂に留まっていたところがあった。しかしイエスの死後、彼はイエスの言行動を振り返って反省し、また多年の宣教活動による人生のさまざまな体験を通して、高く深く成長し、第一の魂から第二の魂へと発展して行ったのである。ヨハネの使命は、人々に愛の意義を説き、愛の力に於いて信ずるよう語ることであった。

Men should, for love's sake, in love's strenght believe; (l. 148)

人は愛のために、また愛の力に於いて信ずるべきである

彼は友に書簡を送り、“God is love”⁽¹⁹⁾「神は愛である」と語り、友は彼の言葉が正しいと言って信じてくれた。しかし世の中に“Antichrist”「キリストに敵対する者」が現われて来たために、彼は忘れ去られ誤って述べ伝えられている主イエスの生涯を記述したのである。世に懐疑と不信の兆が見えて来た頃、彼は病にかかり、難を逃れるために弟子たちに連れられて荒野の洞窟へと来た。彼は世にはびこる懐疑と悪に対して、超然とした態度で確信に満ちた言葉を吐くのである。

Though the whole earth should lie in wickedness,

We had the truth, might leave the rest to God. (ll. 186-7)

たとえ全世界が悪事のうちに横たわろうとも、
わたしたちが真理を捕えたならば、その他のことは神に任せておけ
ばよい。

私達はこれを十九世紀の懐疑思想に対する Browning の反論として読むことが出来ないであろうか。すでに見てきたように、詩人は Strauss や Renan の高等批評や *Essays and Reviews* 『随筆と評論』に於いて語られたイエスの神話的人物説やヨハネ不在説を意識して書いているものと解せられる。

次にヨハネは、イエスの生命は生きる現実であり、実在であると深い悟りに到るのである。これは魂の最も深いところで認識されるものであり、人間とイエスの究極の対話である。

Is it for nothing we grow old and weak,
We whom God loves? When pain ends, gain ends too.
To me, that story—ay, that Life and Death
Of which I wrote “it was” —to me, it is;
—Is, here and now: I apprehend nought else. (ll. 206-10)

神に愛される私たちが、老いて弱るのは無益なことであろうか、
苦しみが止む時は、進歩もまた終る。
私にとって、あの物語—そうだ、「それがあった」と
私を書いたあの生と死は—私にとって、それがあると言うことである。
—ここに今ある。私は他のことを何も知らない。

ここには「一瞬にして永遠」⁽²⁰⁾の実相を直観する Browning の張り詰めた詩魂が躍動しているのが感じられる。イエスの復活は、未来に於いて見られる現象ではなく、“here and now” 「今ここで」顕示される永遠の生命なのである。ヨハネは、この究極の真理を第三の魂で見ている。

Is not God now i' the world His power first made?
Is not His love at issue still with sin,
Visibly when a wrong is done on earth?
Love, wrong, and pain, what see I else around?
Yea, and the Resurrection and Uprise
To the right hand of the throne—what is it beside,
When such truth, breaking bounds, o'erfloods my soul,
And, as I saw the sin and death, even so
See I the need yet transiency of both,
The good and glory consummated thence?
I saw the power; I see the Love, once weak,
Resume the Power: and in this word "I see,"
Lo, there is recognized the Spirit of both
That moving o'er the spirit of man, unblinds
His eye and bids him look. (11. 211-25)

神は今初めに力でもって創造した世界にいないであろうか。
悪が地上に於いて行われる時、
あきらかに神の愛は、今も罪と争っているのではないか。
愛、悪、苦悩の他に何が私のまわりに見えるのか。
実に復活して天に昇り、
神の玉座の右に座している—
かくのごとき真理が、限りなく私の魂を満たし、
またかつて私が罪と死を見たように
今もなお罪と死のはかなさを見る、
それ故善と栄光が完成されるのを見る時、
その側にあるものは何であろうか。
私がかつて神の力を見た、かつて弱かりし愛が、
力を再び占めるのを見る。そしてこの「私は見る」という一語の中
に、
人の霊の上に漂い、人の眼を開いて見せる力と愛と聖霊が認められ
る。

ヨハネの霊眼には、罪や死と争っている復活したイエスや神の姿が見えるのである。彼は神の世界に参入し、神の愛と力と聖霊を覚醒した第三の魂でもって見ている。ヨハネの語る神と人間との交わりに関して、宮内彰氏は次の様に述べている。

ヨハネは神秘主義者が、人間のいのちが無媒介的に神のいのちに融合すると見る神人合一の思想は持ち合わせていない。ヨハネは神と人間との交わりは、つねにロゴスの受肉者イエス・キリストを媒介とする人格的な交わりにおいて可能となると考えた。その場合、ヨハネは神との交わりは、神に関する教理を知的に承認することをもって万事足れりとししないで、彼は神の本質の深い所まで立ち入っているために、神は光であり、霊であり、愛であるというように究明しているのである。これは神と人間が人格的交わりを超越して合一する神秘的経験ではなく、あえて言えば、交際神秘主義（ダイスマン）とも、信仰神秘主義とでもいい得るものである。⁽²¹⁾

ヨハネの霊的な認識は、神と魂との交流であって決して融合ではない。彼は冷静な魂の目でもって対象を正しく把握し、客観性を堅持し続ける。その態度には、魂の偉大さと限界を知る Browning の透徹した詩精神が示されていると言える。ヨハネの一生は、第一の魂から第三の魂を経験する過程であったとすることができる。真理の究極を洞察したヨハネにとって、地上での死は新しく永遠を生きることであり、まさに新生に他ならないのである。

V ヨハネの信仰と懐疑

ヨハネは彼の死後弟子たちが受けると思われる懐疑について予想する。最初にヨハネの存在と体験についての疑惑が生じて来る。

Was John at all, and did he say he saw?
Assure us, ere we ask what he might see! (ll. 335-6)

ヨハネは本当にいたのか。彼は見たと言ったのか。

彼が何を見たか問う前に、それをはっきりさせてくれ！

弟子たちは、ヨハネの死後新しい国や変りはてた古い国に於いて、“a heavy burthen”「耐えがたい重荷」に直面し、苦難に耐えていかなければならない。次に彼は、愛と力の顕現であるイエスの実在についての懐疑を推察する。人々は、イエスを自己の心の投影であると捕え、イエスの神性を無視するのである。

Has He been? Did not we ourselves make Him?
Our mind receives but what it holds, no more. (ll. 377-8)

キリストはかつて実在していたのか。私たち自からがキリストを作り出したのではなかったか。

私たちの心は、それが捕えるものだけ受け入れる。それだけだ。

人々の懐疑は留まることを知らず、神の力や愛や意志にまで及んでいく。

Ever the will, the intelligence, the love,
Man's! (ll. 412-3)

意志も知性も愛も
人間のもの！

ヨハネによると懐疑の生れる源は、人間中心の考え方に根ざしている。人間は大きな世界の偉大なる意志や見えざる神の手に反発し、自己を神と思い上がるのである。真理を求めるための懐疑ではなく、懐疑のための懐疑は最終的に魂の死を招くことになる。

For I say, this is death and the sole death,
When a man's loss comes to him from his gain,
Darkness from light, from knowledge ignorance,

And lack of love from love made manifest;
A lamp's death when, replete with oil, it chokeys;
A stomach's when, surcharged with food, it starves. (ll. 482-7)

私は言う、これこそ死、死以外のものではない、
獲得しても喪失し、
光から暗闇が生まれ、知識から無知が生じ、
愛から愛の欠乏があらわれる時。
油があふれて、明りが消えれば灯火の死、
食べ過ぎて、飢えれば胃の腑の死である。

Plōtinus は悪の起源について、「諸々の靈魂にとりての悪の始源は向う見ずとか生成欲とか差別の始とか自己に属せんと欲する（我を張ろうと欲する）ことである。」⁽²²⁾と述べている。「自己に属せんと欲すること」つまり自己中心的な人々の心中に巣くう根深い懷疑に対して、ヨハネは力強い弁護の言葉を吐くのである。彼の主張の中心は、魂の限りない発展の主張であり、それは彼の信仰の中核を形成する最も重要な信念と言える。そこには人間の尊厳と言える靈性の優位性への確信と愛に基づく至福な行為の必要性がありありと認められるのである。

I say that man was made to grow, not stop: (l. 424)

人は成長するために作られ留まるためではない。

ヨハネは今すでに奇跡の時代が終ったことを説き、私たちに必要なことはキリストに於いて神を認める信仰であって、それは理性によって充分理解し受け入れることが出来ると語る。人間は神でもなく獣でもない、常に進歩発展する存在である。そして人が常に進展していればついには“the ultimate angels' law”「究極の天使の法」に達することが出来る。これは第三の魂による宗教的な認識を意味するものであり、理性的認識では達し得ない深遠な信仰の世界である。そこには、法則、生命、喜び、力が満ち溢れ、永遠の生命が流れている時空を越えた神界が広が

っている。

There where law, life, joy, impulse are one thing! (I. 633)

そこでは法則、生命、喜び、力が一つになる！

かくしてヨハネの独白の言葉が終了する。彼は地上に於ける最後の言葉を語り終えると、静かに永遠の眠りにつく。時は真昼を過ぎ、日の傾きかけた頃であった。その日の夕方、五人の付き添い人たちは、彼を葬り各々別れて自ら志す方向へ向って散って行った。ヨハネの亡き後、彼らは、もろもろの懐疑と戦い、神の教えを宣べ伝える厳しい使命に立たされるのである。

VI おわりに

私たちは、ヨハネの宗教経験に基づく霊的な認識をたどり、霊性の優位性と愛による至福な行為の真実性を考えてきた。彼は魂の活動的な発展を重視し、特に第三の魂“*What Is*”の宗教的直観による真理の認識に、いかなる知性や懐疑思想でも決して犯すことの出来ない絶対の確信を抱いている。霊的直観から得られる神の愛と力の交流に於いて、彼は透徹した霊眼でもって神の愛や力があるがままに疑視している。Wordsworthが「ティンタン寺院」に於いて捕えた“*We see into the life of things*”⁽²³⁾「私たちは物の神髄を視透する」あの“*a living soul*”「生き生きとした魂」を思い起こすことが出来る。Browningは、Wordsworth同様究極の際に霊の眼で対象の核心を“*see*”「透視す」のである。これこそまさにR. Langbaumが述べている“*an act of identification with the object*”「対象との同一化はかる行為」そのものなのである。

Browningはヨハネの対象を透視し同一化する霊的経験を通して、自己と神を認識し、神の愛と力と意志を直観し、霊性の優位性を悟り愛に基づく至福な行為に自己の全てを捧げることに無上の価値を見出したのである。そこには神を求めてあくことなく戦い続ける強い熱気に溢れた詩人の魂が顕示されている。地上の生の終焉に訪れるヨハネの荒野の洞窟での死は、肉体の死を越えて魂の復活へと到る新生の暗示である。こ

れに反して懐疑に生きる傲慢な人々こそ荒野の洞窟に幽閉され魂の死に瀕していると言えるであろう。

〔注〕

- (1) W. C. DeVane: *A Browning Handbook*, New York, 1955, P. 295.
- (2) E. LeRoy Lawson: *Very Sure of God*, Vanderbilt University Press, 1974, p. 85.
- (3) *Ibid.* p. 85.
- (4) *Ibid.* p. 85.
- (5) Robert Langbaum: *The Poetry of Experience*, The University of Chicago Press, 1985, p. 35.
- (6) *Ibid.* p. 24.
- (7) W. C. DeVane, p. 296.
- (8) *Ibid.* p. 296.
- (9) *Ibid.* p. 296.
- (10) Roma A. King, Jr: *The Focusing Artifice*, Ohio University Press, 1968, pp. 125-6.
- (11) W. C. DeVane, p. 297.
- (12) 宮内彰著『ヨハネ その人と神学』, 日本基督教団出版局, 1971年, p. 141.
- (13) *John*, xi, 25.
- (14) *Pauline*, II. 268-80.
- (15) 鹿野治助著『プロティノス』, 弘文堂書房, 1949年, p. 176.
- (16) 「北星論集」(20号)(1982年), 拙文「R. Browning: *Abt Vogler*について」, p. 86.
- (17) アウグスティヌス『告白』山田 晶訳, 世界の名著14, 中央公論社, 1986年, p. 494.
- (18) W. L. Phelps: *Robert Browning*, Archon Books, 1968, p. 116.
- (19) *John*, v. 16.
- (20) 「北星論集」(16)(1978年), 拙文「Robert Browningの“By the Fireside”について——“one and infinite”を中心に——」, pp. 174-81.
- (21) 宮内彰著『ヨハネ その人と神学』, p. 141.
- (22) 鹿野治助著『プロティノス』, p. 220.
- (23) W. Wordsworth, *Lines Composed A Few Miles Above Tintern Abbey*, ℓ. 49.